地域が変わる
地域活性化の現場

近江八幡

沖島漁業協同組合

琵琶湖に浮かぶ島の恵みを生かした〝島づくり〟
特産品の開発、漁業と観光業の連携で活路を模索

国内の淡水湖の中で唯一、人が暮らす島、沖島（おきしま）。源氏の落武者が流れ着いたことが始まりとされ、約850年の歴史の中、島民の暮らしは常に漁と共にあった。しかし近年は、後継者不足に悩まされている。危機の中、沖島漁業協同組合を中心に、島の特長を生かした地場産業のあり方を模索する、未来への取り組みが積極的に行われている。

湖魚漁を支える島の漁師 後継者難に危機感を募らせる

近江八幡市の北部、沖合1・5㎞に位置する沖島は、周囲6・8㎞の島内に300人余りが暮らす、国内で唯一の淡水湖に浮かぶ有人島だ。住民のほとんどが漁業従事者とその家族。約7割の世帯が沖島漁業協同組合に加入し、組合員数は現在98名。アユ、ワカサギ、モロコ、ウロリ、ニゴロブナ、ビワマス、エビなどの湖魚を中心に漁を行い、水揚げ量は滋賀県内で最も多く、全体の半分以上を占めている。

沖島漁協は、まさに琵琶湖の漁業を支える中心的な存在といっても過言ではない。しかし、沖島の漁業を取り巻く環境は年々厳しさを増している。水環境の悪化、外来種の増加による琵琶湖固有の在来魚の減少、魚の価格の低迷、船舶の燃料費コストの上昇。島民の高齢化と人口減少も止まらない。中でも深刻なのは漁業の後継者不足だ。

「島を出た若者が帰って来ない。不安定な漁業の将来を考えると、親が子供に『戻ってきて後を継いで欲しい』と言うことができない。湖魚漁の技術はいったん廃れてしまったら、経験のない者が一からやり直すのは困難。このままでは、あと10年経つと漁師は今の半分になってしまうかもしれない。自分たちが元気なうちになんとかしなければ」と森田正行組合長は危機感を募らせる。

漁業と観光をつなげる 「ふな寿司手作り講習会」が人気

この状況に、漁協はもちろん、手をこまねいていたわけではない。観光との連携や水揚げした魚を加工・販売まで手掛けて6次産業化への脱皮を模索するなど、漁業と島の未来に向けた挑戦をしている。

島内には自動車が1台もなく、信号機もない。ゆったりした島の暮らしの風景、豊かな水と緑、藤原不比等が建立した奥津島神社などの史跡が伝える歴史ロマンに惹（ひ）かれ、多くの観光客が沖島を訪れる。観光客の主な交通手段は、対岸の堀切港との間を1日12往復する通船だが、土・日・祝日には琵琶湖汽船の湖島めぐりの定期クルーズ船も寄港する。琵琶湖汽船とは漁協が窓口となって、10年以上前から協力して島の観光振興に取り組んできた。

国内唯一の淡水湖に浮かぶ有人の島。その玄関口は沖島漁港だ

7月、琵琶湖汽船と漁協の共同開催で「ふな寿司手作り講習会」が開催された。これは、沖島で獲れた天然の子持ちニゴロブナを用い、ふな寿司の漬け込みを体験するもので、参加者たちは、漬け込んだふな寿司を密閉された樽で持ち帰り、冬には各家庭で味わうことができる。2009年に始めたときには、1回だけだったが、水替えの手間がなく、臭いの心配もないなどの口コミが広がり、今年は全7回開催するまでに拡大。それも、各会とも予約でいっぱいになるほどの人気だ。

毎回、大盛況の「ふな寿司手作り講習会」

漁協婦人部「湖島婦貴の会（ことぶき）」が 沖島ブランド品の商品開発

ふな寿司手作り講習会では毎年、昼食に、漁協の婦人部「湖島婦貴の会」が調理した「沖島丼」が提供される。これは、沖島で水揚げした季節の魚の刺身、かきあげなどを盛りつけた海鮮丼で参加者たちの楽しみとなっている。事前予約をすれば観光で訪れた際にも食べることができる。同会では、湖魚の佃煮なども以前から製造し、漁業組合会館に設けたショップで販売する他、漁協のホームページでの販売、市内のホテルへの卸売りなどを行い、沖島ブランドの特産品の開発・製造・販売の拡大に取り組んできた。

沖島で採れる旬の食材で作られる「沖島丼」

なかでも、11年に外来種駆除の目的で水揚げされたブラックバス、ブルーギルを材料に開発した「よそものコロッケ」は、島外の総菜店などでも販売され、B級グルメとして注目を集めている。

離島振興法の対象地域に 発展する島への道筋を付ける

13年、沖島は国の離島振興法の対象地域に指定された。沖島町自治会を母体にして「沖島町離島振興推進協議会」が作られ、県との協議を重ね、「滋賀県離島振興計画」もまとめられた。同計画には漁業を中心とした「産業の振興」「観光の開発」の項目も盛り込まれ、漁協を中心にした新しい取り組みの大きな追い風になっている。

協議会が中心となり、沖島を盛り上げるファンクラブ「もんて」が今年1月に開設され、会員募集を始めた。「もんて」とは沖島の島言葉で、「戻る、帰る」との意味があり、「もんてこい（＝島に戻っておいで）」という思いが込められている。さらに、今年8月には、沖島の自然の景観を楽しむ遊覧船「もんてクルーズ」の航路が認可された。年内は試験的に運航し、本格的な運航開始を来春の桜のシーズンに間に合わせる予定だ。「船から見る沖島の桜はとても美しく、陸からとは違った趣がある。これまで限られた人しか見ることができなかったが、遊覧船でもっと多くの人に、その魅力を知ってもらえたら」と協議会の西居英治相談役。

離島振興法は23年度末まで適用される。それまでの間に国の支援を利用して住民、来訪者、双方にとって魅力ある島としての基盤をどれだけ整備できるかが重要だ。「安全で機能的な漁港と学習船、観光船が寄港できる港の整備をしたい。研修施設、宿泊施設などの観光客の受け入れ体制の充実も図りたい。特産品の加工販売所、宿泊施設が一つになった施設を建てたいなど、プランは膨らむ。漁業の安定化を図るためにも、漁業組合の法人化も検討している。これからの島は次の世代がつくっていく。そのために、私たちは発展できる島にする道筋をつけていきたい」と森田組合長は語る。